

# 看護師を目指す留学生と看護教員が日本語教師と 日本語の教材に期待すること

— 留学生・看護教員へのインタビュー調査から —

What International Nursing Students and Teachers Expect from Japanese Language  
Instructors and Japanese Language Learning Materials:  
Based on Interview Surveys

山元一晃<sup>1</sup>

Kazuaki YAMAMOTO

加藤林太郎<sup>2</sup>

Rintaro KATO

浅川翔子<sup>3</sup>

Shoko ASAKAWA

## 要旨：

本稿では、看護留学生と看護教員に対して行ったインタビューから、双方のニーズの重複や相違について明らかにし、日本語教育や言語面での支援に役立てることを目指した。筆者らが国内の特定の大学において実施したインタビューから、日本語教材に期待すること、および、日本語教師に期待することについてインタビュアーが質問している部分を抽出し、それぞれの語りを分析した。その結果、教材として期待することとして「実習記録の書き方が学べる教材」「実習場面での会話の教材」が双方から挙げられた。一方で、留学生全員が言及した「専門用語に特化した教材」については、専門用語は他の学生にとっても新たに学ぶことであり、看護教員としては必要性を感じていないようであった。「専門用語」については、留学生からは日本語教師に期待することとしても述べられており、そのニーズは高いものであるといえる。日本語教師に期待することについては、双方が一致することはなく、それぞれのニーズが異なることが指摘された。留学生からは、「専門用語」の他に、「書き方の指導や添削」や「会話場面の練習」があげられた。看護教員からは、「支援に関する知見」や「自然な日本語に触れさせること」「文法的に自然な文が書けるようにすること」など、看護の専門性に踏み込まない範囲での期待が語られていた。

**キーワード：** 専門日本語教育 看護留学生 看護教員 インタビュー調査 ニーズ

---

<sup>1)</sup> 金城学院大学文学部

<sup>2)</sup> 神田外語大学留学生別科

<sup>3)</sup> 慶應義塾大学看護医療学部

## 1. 背景と目的

日本私立看護系大学協会の調査によれば、日本国内の看護系大学において、看護師を目指す留学生（以下、看護留学生）が一定数いることが明らかになっている（日本私立看護系大学協会 2019）。また、日本政府が外国人労働者の受け入れに舵を切っている状況を踏まえれば、看護留学生も増加する可能性が高く、彼らに対して日本語教師がどのような支援を行えるのかを明らかにする意義は大きい。そのような状況において、国内で看護師を目指す留学生に対する支援のための知見は多くないが、安留（2009）、加藤・浅川・山元（2021）などが留学生に対するインタビュー調査を行っている。

一方、筆者らは看護留学生の支援にあたる中で、留学生が日本語教育に求めることと、留学生を支援する看護教員が日本語教師に求めることが異なっているように感じていた。

本稿では、筆者らが看護教員に対して行ったインタビューおよび看護留学生に対して行ったインタビューから、それぞれが何を求めているのかや、双方のニーズの重複や相違について明らかにし、看護留学生に対する日本語教育や言語面での支援に役立てることを目指す。

## 2. 先行研究

日本国内において看護師を目指している留学生に対する研究は、安留（2009）および筆者らによるものを除きほとんど見られない。一方、日本国外においては、主に英語圏での研究が行われている。Crawford & Candlin（2013）は、英語を第二言語とする看護学生の言語的なニーズと英語の言語サポートプログラムについての文献横断的な分析を行っており、その結果として、学術的な英語の運用能力が不足していると、特に初年次において

は、アカデミックな場面における困難を克服することは難しいこと、また、相応の学習言語能力（Cummins, 1991）を獲得するように支援する必要があることを指摘する。

日本国内については、安留（2009）が看護学校を経て病院で勤務するベトナム人看護師と職長・先輩看護師等にインタビューを行い、その結果をまとめている。ベトナム人看護師からは、「日本の看護師資格を取得してきた自信と将来へのさらなる向上心がうかがえた」（p. 237）という。一方で「同僚看護師や患者とのコミュニケーションに戸惑いを感じる場面があり、初めから周囲に100%受け入れられていたわけではない」（p. 237）という。一方、職長・先輩看護師からは、文化的な側面からのトラブルについての言及があったという。また、経済連携協定（EPA）により受け入れた看護師候補者を支援する財団法人海外技術者研修協会のEPA担当者や日本語研修担当者にもインタビューを行っている。ただ、看護師を目指す当事者に対するインタビューなどは行われていないようである。

筆者らは、留学生および看護教員に対するインタビューを行ってきている。加藤・浅川・山元（2021）は、看護教員に対するインタビューをまとめており、看護教員からは、言語的側面、専門教育的側面の両面から困難さが指摘されていた。インタビューにおいては、看護教員が日本語教師に求めることについての言及もあったが、看護教員から見た留学生の困難に重点を置いている。

留学生へのインタビューについては山元・加藤・浅川（2022）でまとめている。加藤・浅川・山元（2021）と同様に、留学生が抱える困難に重点を置いた。その結果、留学生が抱える困難には、形式的なもの、内容的なもの、語彙的なものがあり、各自が工夫して困難を克服している様子が見られた。

本稿においては、この加藤・浅川・山元（2021）および山元・加藤・浅川（2022）では焦点をあてなかった、留学生や看護教員が日本語教師や日本語の教材に求めていることを中心に分析していく。

### 3. 方法

筆者らは、2020年3月に、国内の大学の看護学部において留学生の支援にあたる看護教員にインタビューを行った。また2021年8月に同じ大学で学ぶ看護留学生に対して遠隔でインタビューを行った。前者については、加藤・浅川・山元（2021）に、後者については、その一部を山元・加藤・浅川（2022）で既にまとめている。どちらにおいても、以下の5つの質問を中心とした半構造化インタビューを実施している。

1. 日本で看護師を目指す留学生はどのような場面で書く必要があるか
2. 授業・演習・実習において書くもの（書いたもの）について、何が難しいと感じるか
3. 授業・演習・実習において、困ったことと、それに対して受けた支援や行っている工夫は何か
4. 看護師を目指す留学生として活用できるとすれば、どのような教材が欲しいか、
5. 日本語教師に期待することは何か

そのうち、本稿では、4. および5. の2点についてのみ考察対象としている<sup>1)</sup>。このことにより、看護教員と看護留学生の双方が、または、一方が、日本語の教材や日本語教師に期待していることが明らかになると考えたためである。なお、インタビューは、同じ学部にも所属する教員および留学生に行っており、前者は対面で、後者は遠隔で行った。教

員へのインタビューは、表1に示した4名の教員を各2名ずつ（T1とT2、T3とT4）に分けて行っている。また学生へのインタビューは、表2に示した留学生に1名ずつ行っている。

表1 インタビュー対象看護教員

教員	看護教員経験年数 (当時)	看護師としての 実務経験年数(当時)
T1	4年	17年
T2	7年	23年
T3	4年	11年
T4	4年	7年

表2 インタビュー対象看護留学生

学生	学年(当時)	入学年度	母語
A	4年生	2018	中国語
B	4年生	2018	ベトナム語
C	3年生	2019	中国語
D	3年生	2019	中国語
E	3年生	2019	中国語

教員に対するインタビューにおいても、学生に対するインタビューにおいても、山元がインタビュアーを担当した。会議室において対面形式で実施した教員に対するインタビューでは、加藤がオブザーバーとして部屋の端で適宜メモなどを取った。また、オンライン会議システムを使用した学生へのインタビューでは、浅川または加藤がビデオ・音声をオフにしてオブザーバーとして参加し、適宜メモなどを取った。

インタビューの音声データは文字化し、日本語教師である山元および加藤と看護教員である浅川とが、ともに重要だと判断した箇所を抽出した。

### 4. インタビュー結果

インタビューの発言を引用<sup>2)</sup>しながら、留学生・看護教員によって語られた内容について整理して提示する。

## 4.1 欲しい教材

学生および教員へのインタビューで、欲しい教材を尋ねたところ、大きく以下の4種類について言及があった。専門用語についての教材と、授業の内容を復習できるような教材以外は、看護教員のインタビューからも同様の指摘があった。ただ、看護教員からは、「何か求めているものが、やっぱり日本人と同じレベルのところだと思うんです」(T2)との指摘があり、特に看護に特化した留学生向け教材は求めているという意見もあった。

### 4.1.1 専門用語に特化した教材

留学生全員が欲しいと指摘した教材は「専門用語に特化した教材」である。特に、器具の名称や外来語が難しいと考えているようで、1年次から専門用語の学習がしたいとのことであった。専門用語には、「演習も今後の、●、病院に置いてる物、部品の名前とか、それが大事かなと思って」(A)という語りで見られるように、病院や演習室にある器具の名称なども含んでいる。「何かこう1年生のときにばんばん、ばんばん専門用語出て分からなかったり、のが多かったし、多かったかもしれないですね。特に片仮名。」(D)という語りからは、初年度から授業において専門用語が使われ、特にその中でもカタカナのものを難しく感じていたことが分かる。

具体的には、「各科目によって、言葉、何かJLPTの文字・語彙の本みたいな感じの教材が、医療系の言葉」(B)という語りから分かるように、日本語能力試験の対策本のような教材が欲しいという意見があった。また、「写真付き」(A)のものだとよいという意見もあった。

一方、看護教員へのインタビューからは、専門用語が分からないのは日本人と同様であり、あえて学ばせる必要はないととらえてい

るようだった。また、語彙について母語の干渉があることは語られていたが、教材の必要性や学習の必要性については、特に言及がなかった。

### 4.1.2 実習記録の書き方が学べる教材

4名の留学生は、「実習記録の書き方が学べる教材があると良い」とのことであった。「K先生の授業も使ってた教材とか」(B)と述べられ、インタビュー対象者の授業でも使用していた山元・浅川・加藤(2021)で紹介した教材があると良いと述べていた。この教材については、別途インタビューをし、山元・浅川・加藤(2022)にまとめたので参照されたい。ただし、「記録物のものっていうか先生、その授業中の先生の、先生よりもうちょっと詳しく説明もらえるの、そういう教科書があればいいなと思います」(E)という語りから分かるように、より詳しい教材が欲しいという言及もあった。看護教員からも「看護記録を書くみたいな部分を、例えば、実際に経時記録なり、記録を書かせてみて」(T4)という語りがあり、実習記録の書き方を学べるとよいとの指摘があった一方で、記録については、「この場合にはこういうふうを書くんだよって、一例を示してあげると、やっぱり日本人の学生もこれを考えなくなる可能性ってある」(T2)という語りから分かるように、教材化することで、学生が考えなくなってしまうという懸念も示された。

### 4.1.3 実習場面での会話の教材

3名の留学生から「実習場面での会話の教材があると良い」との指摘があった。具体的には、「30分とか1時間程度のカンファレンスがあるんですけど、そのときで、なんか自分の、表現したいことをちゃんと表現できるような本」(A)という語りから分かるよう

に適切な表現が学べる教材が期待されていた。また、「何か実習での場面の会話とかの教材がいい」(B)という言及もあり、実習で直面する場面の会話が学べるテキストも求められていた。看護教員からは、「実習場面での会話の教材」について、尿のことを「お小水」と言うなど、「書かれたことと、それを実際に患者さんに伝える、まあ、話し言葉になっちゃうんですけど、話し言葉に変換するのが難しい」(T3)のために、適切な語彙や表現を学べる教材や、適切な言葉掛けを学べると良いとの指摘があった。「電話とかこうかけますよみたいな」(T2)など、看護師や看護学生が日常で直面する場面を学べる教材についての要望もあった。

#### 4.1.4 学んだことを復習できるような教材

1名から「学んだことを復習できるような教材が欲しい」との指摘があった。「授業で教えたものをもう一度、一緒に復習するみたいな授業があったら」(C)と語られている。

### 4.2 日本語教師に期待すること

日本語教師に期待することとして、留学生からの指摘は多様であった。ただし、CとDの2名は、特にないとのことだった。

#### 4.2.1 会話場面の練習

まず、2名から会話についての言及があった。「医療系の会話とか、分かんない」(B)ため「会話の場面とか練習してくれたりすると助かります」(B)とも語られており、医療場面の会話を学びたいという学生もいた。看護教員からは、会話に関する言及はなかった。

#### 4.2.2 レポート・記録物の書き方の指導や添削

1名から「レポートの書き方とか教えてくれたりして」(B)とレポートの書き方の指導が欲しいという指摘があった。また、他の1名から「自分で書いたの、レポートのものとか、今は3年生なので記録物があるので、その記録物を提出した後は、もし日本語の授業を取る、日本語のその先生からちょっと修正した後のものが欲しい」(E)との指摘もあった。教員へのインタビューにおいては、「こないだも1年生の記録読んでみて、こんなに書けるの？って思うぐらい上手に書いてたんで。日本語の先生、直してくれたんだと思ってまして」(T4)という語りから分かるように、添削が役に立ったとの言及があった。

#### 4.2.3 専門用語の指導

2名から専門用語について指摘があった。「まあ、1年生のときは、やっぱり解剖生理の授業とかが、日本、漢字が多いし、あと専門用語の言葉はすごい多かったから、あんまり分かんなかった。解剖生理の授業、あと何だろ、もっと病名とか」(B)とのことで、専門用語を授業で教えて欲しかったという。一方、「専門用語に限らずに、日常的な単語とかも」(A)と語られており、広く語彙を授業などで扱って欲しいと思っている留学生もいることが伺えた。専門用語の指導については、看護教員からは指摘がなく、先述したように、日本人学生であってもはじめて学ぶ語彙が多いことからあえて学ぶ必要はないと考えているようだった。

#### 4.2.4 不適切な日本語の指摘

1名から、授業に限らず、会話時に不適切な表現を使っていたら指摘して欲しいとの語りがあった。「普通に会話できるんですけど、

そんなに細かいのが、違いはもう教えてくれないから、もし先生と会ったとき、また授業のときで、指摘くれると、ちゃんと、直せるかなと考えていますので」(A)と述べられており、普段から適切な表現を用いて会話ができるように指摘してもらいたいとのことであった。

#### 4.2.5 その他

看護教員から、「何か率直に日本語の先生に自分がどうやって留学生と関わっていったらいいかを教えてほしい」(T3)という語りがあった。その理由として「何かむしろ留学生に対するご指導をすごい熱を入れてやってくださってるのは理解している。むしろ自分の関わり方の問題もあるんじゃないかって」(T3)と述べており、留学生への支援の難しさを感じており、留学生と関わる機会の多い日本語教師の知見を得たいようだった。

また、「何かもっと日本語に触れられるような、日本語に慣れるようなことができるのかなって思っていました」(T1)という語りから分かるように、留学生が日本語に接する機会を増やして欲しいという要望もあった。具体的には、「ニュースとか、本とか、テレビ」(T1)といったメディアや、「何かもっと書かせたりとかしてほしいかな」(T1)と述べられていた。書く機会を増やして欲しいという要望については、「もうちょっとてにをはを自然に。もうちょっとレベルアップしてくると」(T1)と語られており、文法的に自然な文が書けるようにして欲しいということが理由として挙げられていた。

### 5. 考察

本節においては、留学生のみが期待すること、看護教員のみが期待すること、および、双方が期待することについて整理し、考察し

ていきたい。

#### 5.1 留学生・看護教員の双方が期待すること

留学生と看護教員の双方から期待されている教材には、「実習記録について学べる教材」があげられた。ただ、看護教員からは模範例を示すことによって日本人学生が考えなくなってしまうのではないかという懸念が挙げられていた。

また、「実習場面での会話の教材」も、双方が言及していた。留学生からは場面ごとの適切な表現が学べるとよいとの指摘があった。一方で、看護教員からは、適切な語彙や表現、言葉掛けを学べる教材がよいとの指摘があった。

このことから、教員と留学生の双方が、書きことばにおいても話しことばにおいても、その場面において求められる相応しい言語を学ぶ必要があるととらえていることが分かる。ただし、留学生以外の学生と同じレベルのものでよいため、留学生を対象とした教材は必要はないとの指摘もあった。

日本語教師に期待することとしては、留学生と看護教員とで一致する点はなかった。このことから、双方の求めるニーズが異なり、留学生のニーズのみに焦点をあててカリキュラムをデザインしたり、支援の枠組みを考えたりするだけでは、専門教育にあたる看護教員の期待する支援にはならないことが分かる。一方で、看護教員へのインタビューで指摘のなかったことが留学生のインタビューには多くあり、留学生・看護教員の双方に対する丁寧なニーズ調査をすることが必要だといえる。

#### 5.2 留学生のみが期待すること

教材については、留学生全員が「専門用語に特化した教材」を求めている。一方で、看

看護教員は、専門用語に初めて接するのは他の学生も同じであり、改めて学ぶ必要はないと考えており、留学生の認識と異なっていた。留学生は、特に1年次から理解が難しかったという指摘をしていた。インタビュアーによる「それは他の日本人の学生は分かってたけど、自分だけ分からないって感じかな」との質問に対して、Dが「そういう感じはちょっとあったかもしれないですね」（D）と返答するように、他の学生との用語の理解への差を感じていた。「先生の授業の内容も、えっと、理解ができなかった」（C）という指摘からは、専門用語を知らないことにより、講義などの理解にも影響が出ていたことが分かる。

Nation（2001）によれば、第二言語学習者が大学での学びを有意義なものにするためには、専門用語を理解することが重要であるとの研究はすでに多くなされているという。また、Liu & Lei（2020）は、日常言語でも使われる専門用語の知識がないことや、非専門的な場面でも高頻度に用いられる語が多くの意味を持ち、そのうちの専門的な意味を知らなかったりすることで、第二言語学習者にとっては専門語彙の習得が難しいことを指摘している。看護教育においても語彙の習得の重要性が指摘されている（Bosher, 2014）ことを鑑みれば、留学生が指摘するように専門語彙の教材や教育が求められることは明らかである。看護教員に対しては、第二言語習得研究の知見をもとに丁寧な説明をしていくことが必要である。

また、留学生1名からは、「学んだことを復習できるような教材」という指摘があったが、看護教員からは指摘がなかった。

日本語教師に期待することとしては、まず留学生2名から「**会話場面の練習**」があげられた。看護教員からは指摘がなかったが、教

材としては求められていたことから、必要性については感じているようである。また、1名から「**レポート・記録物の書き方の指導や添削**」について述べられていたが、看護教員からは直接的な言及はなかった。ただ、「何かもっと書かせたりとかしてほしいかな」（T2）という語りもあり、指導や添削が役立ったとの指摘があったことも踏まえると、この点についても必要性は感じているといえる。教材と同様に、留学生2名が期待した「**専門用語の指導**」について、教員からの言及はなかった。その他、1名から、「**不適切な日本語の指摘**」への期待もあった。これについて、看護教員からの指摘はなかったが、「可能な限り、修正して返したりは、メールなんかでも修正して返したり」（T2）という語りもあり、看護教員が自ら行っているため、必要性を感じていない可能性もある。

### 5.3 看護教員のみが期待すること

期待することとして直接的に看護教員のみから言及されたことは少なかったが、留学生への支援に関する知見を求めていること、留学生が自然な日本語に触れる機会を増やして欲しいことが語られていた。また、文法的に自然な文が書けるようにして欲しいとのことだった。語彙など、専門的な内容にも踏み込んで欲しいと考える留学生とは異なり、専門的な内容も含む言語教育や言語的な支援は必要だと感じていないようである。

## 6. まとめと今後の課題

留学生と看護教員とで、必要と感じている教材は一致する点が多かったが、専門用語を学べる教材については教員からは指摘がなかった。

日本語教師に期待することとしては、留学生からは、語彙や専門的なレポートの添削な

ど、専門教育に関わることについての指摘があった。一方で、看護教員からは専門的な内容に関わるようなことは、少なくとも直接的には言及はなかった。

留学生からの指摘になかった点として、教員からは、看護教員に対して関わり方のアドバイスをして欲しいという期待や、一般的なものも含めて日本語と接する機会を増やすようにして欲しいという期待があった。

留学生とその支援にあたる教員のインタビューからは、重複するニーズと、一方のみが求めるニーズの両方があることが分かる。したがって、看護系大学における日本語教師の役割や、日本語教育のあり方について検討する際には、双方のニーズ調査が必要であるといえる。Brown (2016) は、専門英語教育のニーズ調査において、コーディネーターや学生、教員などさまざまなステークホルダーへのインタビューが役立ったと述べている。看護に限らず、専門言語教育の文脈では、関係する様々な人へのニーズ調査が必要であることの一端を本稿は示したといえる。

これまで、筆者らは、本稿でも分析した留学生や看護教員へのインタビューから明らかになったニーズを満たすために、語彙や表現の調査(山元・浅川, 2021など)やライティング教材の開発(山元・浅川・加藤, 2021)を行っている。しかし、語彙や表現の調査はライティングに限定したものであり、より広汎な看護専門語彙の調査が求められる。また、会話の教材についても、看護教育において留学生が直面する場面についての調査が必要になってくると考えられる。

本稿では、留学生と看護教員へのインタビューの語りを比較し、双方のニーズの重複と相違を明らかにしたが、教員以外にも、看護教育に関わるステークホルダー(Brown, 2016)は、多様である。今後は、実習先の職

員や、留学生を経た看護師、勤務する病院の職員などに対するインタビューも必要である。また、本稿で扱ったインタビューの対象者は特定の大学の留学生および教員であり、一般化することはできない。他大学でのインタビューやアンケートを通して、共通のニーズと個別のニーズを明らかにしていきたい。

## 付記

本研究は、国際医療福祉大学倫理審査委員会および金城学院大学ヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。また、本稿は、「日本語教育学会2022年度春季大会」において発表した内容に加筆・修正したものである。

## 謝辞

本研究はJSPS科研費 JP19K00744の助成を受けたものです。

## 注

- 1) 留学生に対するインタビューのうち質問項目の1.~3.については、山元・加藤・浅川(2022)でまとめている。
- 2) インタビューは、原則として、そのまま引用しているが、分かりやすさを考慮し、フィラーや繰り返しなどは省略している場合がある。また、留学生の発話についても誤用は適宜修正している。聞き取れない箇所は「●」で表記している。

## 参考文献

- Bosher, S. (2014). English for Nursing. In B. Paltridge & S. Starfield (Eds.), *The Handbook of English for Specific Purposes* (pp. 263-281). Wiley-Blackwell.
- Brown, J. D. (2016). *Introducing Needs Analysis and English for Specific Purposes*. Routledge.
- Crawford, T., & Candlin, S. (2013). A literature review of the language needs of nursing students who have English as a second/other language and the

- effectiveness of English language support programmes. *Nurse Education in Practice*, 13(3), 181-185. <https://doi.org/10.1016/j.nepr.2012.09.008>
- Cummins, J. (1991). Interdependence of first- and second-language proficiency in bilingual children. In E. Bialystok (Ed.), *Language Processing in Bilingual Children* (pp. 70-89). Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511620652.006>
- Liu, D., & Lei, L. (2020). Technical Vocabulary. In *The Routledge Handbook of Vocabulary Studies* (pp. 111-124). Routledge.
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language* (1st Edition). Cambridge University Press.
- 加藤林太郎・浅川翔子・山元一晃 (2021) 「看護教員へのインタビューからみる看護留学生の学びにおける困難とは: 看護留学生向けライティング教材開発を念頭に」『日本国際看護学会誌』4(2), 23-34.
- 日本私立看護系大学協会 (2019) 『「看護系大学に関する実態調査」2018 年度状況調査』 <<https://www.jspcun.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/03/7244def413aa5ac4c2552346fb3d880b.pdf>> (2022年11月14日)
- 安留孝子 (2009) 「介護・看護現場における外国人労働者のコミュニケーションに関する課題: ベトナム人看護師養成支援事業と経済連携協定 (EPA) による受け入れの比較を中心に」『流通経済大学論集』44(3), 19-30.
- 山元一晃・浅川翔子 (2021) 「看護実習記録に用いられる語彙の特徴の分析」『社会言語科学』23(2), 67-80. [https://doi.org/10.19024/jajls.23.2\\_67](https://doi.org/10.19024/jajls.23.2_67)
- 山元一晃・浅川翔子・加藤林太郎 (2021) 「看護師を目指す留学生のためのライティング教材の開発とその活用」『金城学院大学論集 人文科学編』18(1), 129-139.
- 山元一晃・加藤林太郎・浅川翔子 (2022) 「看護師を目指す留学生が直面する困難とは—ライティング教材開発のためのインタビュー調査から—」『社会言語科学会第46回大会発表論文集』134-137.
- 山元一晃・浅川翔子・加藤林太郎 (2022) 「看護師を目指す留学生のためのライティング教材の使用感」『金城学院大学論集 人文科学編』, 19(1), 138-147.